庭と虫と人と 12平方㍍の物語

街中の研究所 日常を映画化

初監督作品で、ＪＴ生命誌研究館の日常から紡がれる歴史や文化の世界を描いた村田さん（京都市下京区・京都シネマ）

街中の研究所の屋上にある小さな庭と虫、そして人間。三者の紡ぐ日常を描いたドキュメンタリー映画「食草園が誘う昆虫と植物のかけひきの妙」が29日から、京都シネマ（京都市下京区）で公開される。初監督を務めた村田英克さん（59）が、20年間勤めているＪＴ生命誌研究館（大阪府高槻市）を舞台に制作した。「ちょっと変わった研究所の日常を、スクリーンで感じてもらえればうれしい」と語る。（広瀬一隆）

同館は、民間の研究機関として生命科学の研究を展開しつつ、一般向けにも生き物の魅力を伝えてきた。

映画の表題にもある「食草園」は同館屋上にある12平方㍍の小さな庭で、ランタナやアザミなどの花にチョウが集まる。カメラは、庭に息づく昆虫たちが織りなす1年を丁寧に追う。

合間には同館メンバーの日常も挟まれる。撮影された2020年秋からの約1年は、作品と同名の企画展の準備期間。「ナミアゲハが見る色の世界」といったテーマごとの展示を作る過程が描かれる。

しかし作品はこれだけでは終わらない。カメラはさらに、自然に関する科学や芸術の領域にも向けられる。

永田和宏さんら登場、あすから京で上映

自然から文化へ 巡る思考

映画「食草園が誘う昆虫と植物のかけひきの妙」の一場面©ＪＴ生命誌研究館

歌人で生命科学者の永田和宏館長と「ファーブル昆虫記」を完訳した奥本大三郎さんのチョウを巡る議論、中村桂子名誉館長と能楽小鼓方大倉流16世宗家の大倉源次郎さんの対談。二つの対話が展開し、生き物と文学や芸能をつなぐ言葉が紡がれる。「科学も日本の風土に合わせて考えていける」という中村名誉館長の言葉などが印象的だ。

エンディングはチョウの精霊が登場する能「胡蝶（こちょう）」の上演映像。ほのぼのとした研究館の日常を見つめていたつもりが、知らない間に別世界へいざなわれるさまを象徴するかのようだ。

「いわゆる科学ドキュメンタリーとは違う、映画作品を作りたかった」と村田さん。映像コンテンツをつくる仕事が長く「若い頃は映画評論家の蓮實重彦さんの講義をこっそりのぞいた」ほどの映画好きという。映画愛に裏打ちされつつ、小さな庭から文化や歴史の広がる様を描く作品に仕上げた。30、31の両日、京都シネマで村田さんや出演者による舞台あいさつを行う。

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社 無断複製・転載を禁じます